

令和 2 年 7 月 3 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02298

研究課題名(和文) 伝統的工芸作品のテクスチャーを活用した日本画のマチエールの研究

研究課題名(英文) Study of matiere of the Japanese painting for which a texture of a traditional work of arts and crafts was utilized

研究代表者

太田 圭 (OTA, Kei)

筑波大学・芸術系・教授

研究者番号：80194158

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：日本画等の絵画作品における画面の「肌合い」は「マチエール」と言い、陶芸・漆芸・染織・金工などの伝統的工芸作品の表面の「肌合い」は「テクスチャー」と呼ぶ。本研究では資料調査、実見調査、実験制作等を通じて新しい日本画のマチエール創出のために、伝統工芸のテクスチャーの活用を追究した。その結果、陶芸と漆芸のテクスチャーに日本画の岩絵具に類似のマチエールが作成できるものがあることがわかり、自身の制作に活用することができた。その成果は、応募者が制作する日本画作品を通じて広く社会に公開したほか、日本画の専門教育を通じて普及に努め、日本画の活性化につなげた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本画制作において、陶芸と漆芸のテクスチャーが、日本画の新しいマチエールとして活用できたことに研究の意義があった。さらにそれをういた日本画作品を春と秋の公募展(審査を経た入選)と企画展に出品し、鑑賞の機会を通して広く社会に公開することができたこと、勤務する大学の日本画の実習授業において、表現方法の一つとして学生達に紹介し、普及に努めたことには重要な意義があると言える。

研究成果の概要(英文)："Disposition" of a screen in the painting work such as a Japanese painting is called "matiere" and "disposition" in the surface of the goldsmith's traditional work of arts and crafts such as ceramics, lacquer arts and crafts, dyeing and weaving are called "texture". Utilization of a texture of traditional arts and crafts was surveyed for matiere creation of a new Japanese painting through resource research, observation and experimental production, etc. in this research. As a result, it was possible to understand that there is some resemblance in matiere of some pigment from rocks of a Japanese painting and a texture of ceramics and lacquer arts and crafts which could be used for my own production. I have widely exhibited the outcome of the research to the society my own Japanese paintings and promoted the outcome through professional education of a Japanese paintings and led it to activation of a Japanese painting.

研究分野：日本画

キーワード：日本画 マチエール 工芸 テクスチャー 岩絵具 銀箔

## 1. 研究開始当初の背景

「マチエール」とは日本画をはじめとする絵画作品における画面の「肌合い」を意味する。一方、陶芸・漆芸・染織・金工などの伝統的工芸作品（以下、伝統工芸と表記）の表面の「肌合い」は「テクスチャー」と呼ばれ、「手触り」「感触」「材質感」「素材感」なども意味する。

報告者は日本画制作の研究者であり、マチエールを表現の重要な一要素として捉えているが、独創性を踏まえた作品のさらなる高みを求めるためには、日本画以外の芸術やデザイン、工芸などの他の領域に見られるマチエールやテクスチャーを日本画のマチエールとして取り入れる必要があると考えた。

絵画作品のマチエールは意図して作り出すものと偶然的にできるものがあるが、他の領域の魅力的なテクスチャーを日本画作品に応用することで、新しい日本画のマチエールを作る技法として確立することが必要であった。これらの異なる領域の表現技法について、その転用や流用に関する論考についての研究は稀有に等しく、本研究を実施する意義があると考えた。

## 2. 研究の目的

本研究では、他の領域に見られるマチエールやテクスチャーを日本画のマチエールとして取り入れることと、経過観察を続行している銀箔の変色防止技法の効果に関して、次の通り3つの目的を設定した。

- (1) 新しい日本画のマチエール創出のために、伝統工芸のテクスチャーに着目し、その活用方法を追求する。
- (2) 平成23～25年度の科研費による先行研究で行った「銀箔の変色防止技法」の効果に異変が生じたことについて、その原因を究明し対策案を構築する。
- (3) 以上の研究成果を、報告者が制作する日本画作品を通じて広く社会に公開するほか、日本画の専門教育（大学の授業、公開講座等）や印刷物を通じて普及に努め、日本画の活性化につなげる。

## 3. 研究の方法

(1)の目的に対する「工芸作品の実見調査」では、伝統工芸作品のテクスチャーを理解することから始めることとし、考察対象を染織、漆芸、陶芸、金工の4種とした。これらの多様な伝統工芸作品は、実見もしくは展覧会図録等を通じて考察した。そこで見られたテクスチャーの中から、日本画のマチエールに活用したいもの、および活用が可能と思われるものを選出した。

「工芸作品の技法調査」では、伝統工芸作品のテクスチャーを、構造や技法面から理解するために関係資料を調査するとともに、必要に応じて研究分担者から専門的知識の提供を受けた。

「日本画絵具による再現実験」では、実見調査と技法調査に基づき、日本画制作で用いる画材（岩絵具、胡粉、水干絵具、膠他）によって、工芸作品のテクスチャーを再現もしくは類似のマチエールを作成し、日本画作品の制作への応用利用を試行した。陶芸のテクスチャーでは、釉薬による表面の光沢は、岩絵具だけでは再現は不可能である。光沢感は必要としないことから、もっぱら色調の再現に重点を置いた。

粒子状の岩絵具はその粒子の大きさによって、一色あたり10種類以上ある。同じ色でも粒子の大きい方が濃色で、細くなるに従って淡い色になる。日本画制作では、それらの多様な粒子の岩絵具を使い分けるのだが、マチエール作りにもその方法が当てはまる。

基本的な手順は、木製パネルに水張りした和紙（雲肌麻紙：福井県産、土佐麻紙：高知県産）を支持体として、膠（接着剤）で水晶末、方解末、珪砂の粒子の大き目の岩絵具を練り、凹凸のある画面を作成した。それらの岩絵具が乾燥した後、天然黄土、田原白土、カオリン、胡粉などの微粒子の絵具を塗布し、岩絵具の粒子の隙間を埋めていった。これによって堅牢で陶器のテクスチャーに近い画面を作成した。また色合いの調整のために、複数の絵具の重ね塗りではなく、天然黄土と田原白土、カオリン（陶土）を混ぜて用いることも試みた。

漆芸のテクスチャーでは、岩絵具を盛り上げるように塗布したり、第1層としてスポンジローラーやゴムローラーをかけて作りだした画面上の凹凸の絵具の上から、別の微粒子の岩絵具類を塗布し、その上塗りが乾燥した後に、金属製のペインティングナイフや銅版画で用いるスクレーパーを用いて削り出し、層状の絵具画面を作り出した。この削り出しの際には、画面を少し湿らせた方が作業がしやすく、また自由に削ることができる。

(2)の目的に対しては、銀箔の変色防止実験のサンプルの継続的な経過観察を行ない、その変色防止技法の効果に関して、効果のある技法と効果が薄い技法を明らかにしながら進行状態を確認していった。その際参考としたのは金工の中の鍛金や彫金の分野で、金銀をはじめとして鉄、銅、鉛を素材に用いる際に使われる「防錆」「人為的な変色技法」「変色防止」の各技法であった。

(3)の目的に対しては「日本画作品制作と公開」を実施した。作品制作においては工芸作品のテクスチャーに日本画のマチエールとしての可能性を探求したが、それらが実際の日本画作品において使用できるか否かだけでなく、一定のレベルを伴う芸術作品として通用するかどうかを第三者の評価に委ねるために、全国規模の日本画公募展（創画展）に応募し審査を受けた。また、大学の専門教育では、マチエールに関する技法や情報を学生に提供し研究内容と方法等について共有した。

#### 4. 研究成果

(1)本研究を通じ、伝統工芸4領域(染織、漆芸、陶芸、金工)のテクスチャーのうち、日本画のマチエールとして参考になったのは陶芸と漆芸のテクスチャーであった。前者では、国内の笠間焼(茨城県)、益子焼(栃木県)、備前焼(岡山県)には天然の土色に基づく色調が応用できることがわかった。もっとも成果が得られたのは、粉引技法で、作品の背景にあたる空間部分に用いたのであるが、乳白色の色調が作品に柔らかな印象を与えることができた。そのマチエールは単に技法としてではなく、制作意図にマッチすることが判明した。その理由としては、天然鉱物から製造された天然岩絵具と人工的に硬質ガラスから製造された新岩絵具を用いる日本画と土を用いる陶芸は、素材面でも共通する要素があるからである。

陶芸作品では釉薬を用いるものがあり、その表面の光沢は日本画に応用しにくいものであったが、色調に注視する中で、岩絵具との共通性を見出すことができた(黄灰釉、緑藻釉、呉須、紅時雨釉等)。特に、鉄絵付けの上から長石釉をかけて制作される「志野焼」にはテクスチャーに絵画性を感じた。また笠間焼には釉薬を用いない作例が多数あり、今後も国内各地の陶芸に関して体系的かつ継続的に考察する予定である。

漆芸では、金箔を用いる加飾技法である「砂子」と「根来塗」などの塗布方法によって作られるテクスチャーが日本画のマチエールとして活用ができる。もっとも「砂子」はこれまでも日本画技法として取り入れられているもので、本研究によってその有用性を再確認することになった。

(2)銀箔の扱い方では金工で用いられる技法が参考になった。中でも銀箔の「人為的な変色技法」については、薬剤を用いる方法は共通しており、最も効果的な方法であることを把握した。鍛金の作品では金属の地金の色を用いた部分と薬剤を用いて変色させた部分とのコントラストの美しさを主張するものがあり、その扱い方を日本画作品で参考にした。

(3)研究成果となる日本画作品は、主に日本画の公募団体である創画会が主催する春秋の展覧会の審査を経て一般公開された(下表)。そのほか、個展やグループ展、茨城県芸術祭美術展覧会等での公開も行い、ギャラリートークがある場合は口頭で解説し、広く研究成果を公開した。また筑波大学で日本画を学ぶ学生に、材料及び技法に関する研究成果を紹介した。

以上の研究成果を踏まえ、期間終了後も日本画作品への活用と展開を継続して行う一方、「銀箔の変色防止技法の効果に異変が生じた原因の究明」については経過観察に止まったため、対策としての技法の確立は継続的な研究課題として引き続き実施する。

表：本研究成果を発表した主な展覧会(いずれも審査付き。入選作品のみ掲載)

発表年	展覧会名	作品題名、サイズ
平成 28 (2016)	第 43 回創画展	「夏の轍」, 181.1 × 227.3cm
平成 29 (2017)	第 43 回東京春季創画展	「風をつなぐもの」, 91.0 × 91.0cm
	第 44 回創画展	「風の向こう」, 162.0 × 112.0cm 「風のシルエット」, 162.0 × 112.1cm
平成 30 (2018)	第 44 回東京春季創画展	「彼方へ」, 91.0 × 72.8cm
	第 45 回創画展	「月影航」, 162.0 × 112.0cm
令和元 (2019)	第 45 回東京春季創画展	「月影航」, 91.0 × 91.0cm
	第 46 回創画展	「星影のディスタンス」, 162.0 × 112.0cm 「月影のディスタンス」, 162.0 × 112.0cm
令和 2 (2020)	第 46 回東京春季創画展	「冬の花」, 91.0 × 91.0cm

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

本研究課題で得られたマチエールを日本画作品に転用し、審査を受けて一般公開に至った事例は次の通りである。平成28(2016)年 第43回創画展「夏の轍」(181.1×227.3cm)、平成29(2017)年 第43回東京春季創画展「風をつなくもの」(91.0×91.0cm)、第44回創画展「風の向こう」(162.0×112.0cm)、「風のシルエット」(162.0×112.1cm)、平成30(2018)年 第44回東京春季創画展「彼方へ」(91.0×72.8cm)、第45回創画展「月影航」(162.0×112.0cm)、「星夜航」(112.0×162.0cm)、令和元(2019)年 第45回東京春季創画展「月影航」(91.0×91.0cm)、第46回創画展「星影のディスタンス」(162.0×112.0cm)、「月影のディスタンス」(162.0×112.0cm)、令和2(2020)年 第46回東京春季創画展「冬の花」。以上の他、委員のため無審査で作品展示を行ったものに茨城県芸術祭美術展覧会がある。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	荒井 経  (ARAI Kei)  (60361739)	東京藝術大学・大学院美術研究科・教授    (12606)	
研究分担者	長崎 巖  (MAGASAKI Iwao)  (20155922)	共立女子大学・家政学部・教授    (32608)	
研究分担者	宮原 克人  (MIYAHARA Katsuhito)  (80400662)	筑波大学・芸術系・准教授    (12102)	
研究分担者	齋藤 敏寿  (SAITO Tosijyu)  (70361326)	筑波大学・芸術系・准教授    (12102)	

